

---

# 光 -ひかり-

美波

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

光 -ひかり-

### 【NZコード】

N1203Y

### 【作者名】

美波

### 【あらすじ】

どんどんと周りの友人たちは結婚して家庭を持つて出産していく。  
気がつけば、28歳になっていた。

気がついたら、わたしは一人ぼっちになっていた。そんな気がした。  
奥手な主人公、秋元心の天然ラブストーリー。

自サイトより改稿移植中です。完了後、続きをこちらで投稿します。

## 第1話 心

空を見上げた途端に降り出した雨がわたしの頬に落ちた。分厚い雲に覆われた空から次第に増える雨の粒が、自分に目がけて降つてくるようで堪らなくなつて頭を下げるべいた。

あの日は午後からは雨の予報だつた。すれ違う人々は手持ちの傘やバッグの中から折り畳の傘を取り出す。

街が一気に様々な模様と色の傘でカラフルになつた。わたしの瞳には、雨に濡れて次第に黒くなるアスファルトの色、一色だけだつたけど。

### 【 光・ひかり - 第一章 雨空の出会い 】

「うわ、写メで見るより大きくなつたねえ」

休日を使って、車で一時間ほどかけて学生時代の友人の麻衣子の宅へ遊びに来ていた。

結婚して二年目の麻衣子は半年前に母親になり今ではすっかりお母さんの顔だ。

「あ。あんまり大きな声出したら起きちゃうかな？」

「大丈夫、大丈夫。一度寝たらなかなか起きないから」

初対面の赤ちゃんはわたしが麻衣子の家に着く頃にはちょうど寝ついていて、

その可愛い顔を見ることは出来なかつたけど、寝ている姿だけでも十分可愛くて癒される。

ベビー ベッドの置かれたリビングで、わたしが手土産に持つてきましたお菓子と麻衣子が用意してくれた紅茶をいただくことにした。

「久しぶりだよね？元気にしてた？あ、お祝い、ありがとね」「うん。…結婚しちゃうと、なかなか会えないよね」「わたしはいつ遊びに来てくれてもいいんだけど？」「いやいや、やっぱ気遣つちゃうよ」

ティーカップを手に顔に近づけると、紅茶の葉のいい匂いが漂つてきた。

「心は、いい人見つかつた？」  
「もう一分かつてそういう意地悪な質問するんだ？」  
「だって、わたしの結婚式に出席する予定つて、あとアンタだけなんだけど？」

「ごめんねー行き遅れてて」

お互にカップに口をつけて田を呑わせると笑い合つた。

「でもさ、まだ二十八歳だよ？みんな、結婚するの早いんだけど」「わたしたち結構みんな早かつたよね？平均二十五くらい？」

わたしたちと言つのは学生時代からずっと仲良くしていた友人たちで、五人いたうち未だ未婚であるのはわたしだ一人になってしまった。

「まあ、ボチボチ頑張るよ」  
「好きな人は？」  
「いないでーす」  
「アテは？」  
「ないでーす」

麻衣子は溜息を吐くと「そういうえばさ」と言つて「これ以上盛り上がりようのない話の話題を変えた。

麻衣子の旦那さんがお仕事から帰つてくるまでの数時間、久々にお互いの近況を報告し合つて、終始笑い合つて楽しい時間を過ごした。

帰宅し家に着く頃、日はすっかり傾いて綺麗な夕焼け空が広がっていた。

道沿いにある家の車庫を出ると、空に映える赤色が眩しくて手を額にあてて影を作る。

すると一台の車が目の前を通り過ぎ、やがて停まった。  
そのままバックをすると、隣の家の車庫に入庫した。  
わたしは眩しい夕陽の光に目を細めながら、その様子をじっと見つめていた。

「心！今帰り？」  
「うん！友達の家、遊びに行つて来たんだ」

車庫を出てきた男性は3歳年上の隣に住む幼馴染だ。  
目と鼻の先の距離から笑顔で手を降つていて。  
可笑しくて、笑っちゃつた。

昔から「心」ってわたしを呼ぶ時はいつも優しい輝くような明るい笑顔でほほ笑んでくれた。

「修ちゃんは、結婚式の打ち合わせ？」

気がつけば、友人たちの間で独身はわたしただ一人になつてしまつた。

そりやあ、友人の結婚式に出席した時は決まって一時的に必ず、結婚したくなる。

でもいつも通りの日常が戻つてくると一気にその気持ちも薄れて行く。

いつもわうだつた。

さつき麻衣子に嘘吐いちゃつた。

一回だけじゃない、何度も何度もついてきた嘘だつた。

好きな人はいるの。

ずっと好きだった人がいるの。

今は、その人を諦めようと必死になつてているところなの。

だから。

今のわたしは結婚なんておろか、恋愛すら出来ないんだ。

## 第2話 幼馴染

佐橋 修司はわたしの隣に住む幼馴染だった。

歳も三つしか離れていないため小さい頃からよく一緒に遊んだ。お互いに一人っ子だったということもあって、兄妹のよしごとくと仲良くしてきた。

「友達って、この間子供生んだ子?」

「そうそうー赤ちゃん、可愛かつたよー。ずっと寝てたけどや」

数えきれないほど訪れた修ちゃんの部屋には、ダンボールが積まれ物が減り、ここに来る度に姿を変えた。

三か月後に迫った結婚式を前に、家を出て婚約者と一緒に一人で新しいお家に住むらしい。

「今、いろいろな準備で大変でしょ」

「そうだなー引っ越しの準備はだいぶ終わったけど」

修ちゃんは「散らかってごめんな」と畳つと台所から持つてきたお菓子の袋の封を開けた。

「食う?」と書いてスナック菓子の袋を差しだされたけど、夕飯前だったから断った。

「ねえ、結婚式の打ち合わせどうだった?」

「うーん……今日はお互にプロフィールについて色々聞かれた

「披露宴で同会者が使うやつ?」

「そうそう!」

修ちゃんは思い出し笑いをすると、「聞いてよ、加奈の奴さ」と言

つた。

婚約者の名前も人物もずっと前から、結婚が決まった1年も前から知っているから今更動搖なんてしたりしない。

「アイツさ、知らなかつたんだけど。出会つた頃から俺のこと好きだつたんだつて。学生の頃だから……十年以上前だぜ？」

「あはは！ ノロケ～？ やだやだ！ やめてくださいー！」

「いいじゃん、付き合えよ。あとちよつとなんだから」

「あとちよつと」の言葉には、たすがに寂しさを感じる。

こんな風に一緒に過ごして笑い合える時間もあと少しだかい。

「でもさ、たつた十年前でしょ？ わたしは十年以上も前から修ちゃんのこと好きだつたけど？」

「確かに？ おまえ子供の頃から俺のこと好きだつたもんね？」

「あ、ちょっと間違えた。昔の話だよ？ 今は好きじゃないもんね」「はいはーい」

ほらね。

本気になんてしてもらえない。

今更もう、想いを伝えることすら叶わない。

膝に置いた手が、無意識に衣服をぎゅっと握りしめた。

子供の頃の夢はケーキ屋さんだった。

不器用でお菓子作りすらまともに出来ない今はただの〇一だ。

アイドルに憧れて歌手になろうとオシャレに田代覚めてマセでた小学生時代。

わたしは、努力だけではどうもならないほど救いようのないオ

ンチだった。

テレビドラマの熱血教師に憧れて先生になりたいと思つたのは高校生の時。

一生懸命勉強したけど大学受験に失敗して、夢に見るだけで終わった。

なんとなく海外の生活に憧れて留学したいなって思つたのは短大生の時。

でも両親に「おまえはジャパニーズだ」とわけの分からぬ反対をされて叶わなかつた。

何よりずつと想い続けてきたこと。

初恋の人のお嫁さんになれたらなって絶えずずつと想い続けてきたことだった。

それも、一年前に叶わない夢だつてことを知つた。

二十八歳にして遅すぎたけど、知つた。

報われない、叶わない想いなんて全部は挙げられないほどにたくさんある。

諦めることには慣れている。

修ちゃんの家を出た頃、真っ赤だつた夕焼け空は色をえていた。暗闇の中に大きく浮かぶ月とポツポツと小さく光る星が映える夜空に変わっていた。

修ちゃんの家の玄関から歩いて三十秒。

自宅の門の前に立つて修ちゃんの方を振り返つた。

こんなにも近いのに、ものすごく遠い。

「やめつけ早<sup>はや</sup>く寝<sup>ね</sup>みつわとー。」

明田からはまたいつも通り仕事だ。

### 第3話 ドリマのやつな出会いが

「秋元さん… おはよ〜」やっこまく

お茶当番だったわたしはいつもより早めに出社して、給湯室でやかんにお湯を沸かしお茶を作っていた。

そこへやってきたのは四歳年下の後輩の女性社員だった。茶色に染めた短い髪がとてもよく似合つ明るい子だ。

「大橋さん、おはよ〜」  
「いきなりなお願いなんですけど……」  
「うーん、難しいかも〜」  
「まだ何も言つてませんよ〜」

田を合わせて笑い合つと大橋さんが「週末、暇ですか」と言った。

「予定は特にないけど……いつもないよね、わたし」「知つてまーす」「言ひね〜?」

大橋さんは再び明るくほほ笑むとわたしと距離を縮めて少し小声になつた。

「合fon、どうですか」「ああ〜」「この間は本当にごめんなさいー失礼な」としおやつて……」「あ、うつと。それは全然いいんだけど」

「の間の」とは。

大橋さんに誘われて彼女のプライベートの友人が主催する合コンに参加した時のことだった。

女性陣は全員まだ肌に張り艶のあるわたしよりうんと若い子たちばかり。

男性陣も、全員わたしより年下だった。

わたしは盛り上げ役に徹していた。

大橋さんはこの事実を知らなかつたらしく、「ちゃんと確認しなくてごめんなさい」と何度も謝ってくれた。

別に、いいのに。

若い人たちに囲まれて楽しかった。

「今日は、ぱつちり男性陣は全員三十代です」

「もしかしてこの間のことに気にかけてくれてるなら別にいいんだよ？」

「そんなんじゃないです。本当に偶然また別の友達から誘われて」

「わたしじゃなくて他の子誘つてみてもいいんじゃないかな」

「……みんな彼氏、旦那さん、もしくは好きな人いますよ？」

「……そうだつたね」

大橋さんの誘いを断る理由が見つかず、OKの返事をした。

わたしの勤める小さな会社には女性社員は十名ほどしかいない。

わたしより年上の社員一人は既婚者だ。

気がつけば独身女の最長老だ、わたしは。

だからみんな気を遣つてくるのか、よく出会いの場には誘つてくれる。

感謝、しないとね。

会社帰りに友人の麻衣子から着信が入った。

昨日、お家にお邪魔した際にトイレにハンカチを忘れたらしい。そんな連絡だった。

ついでにちょっと会話をしてみた。

「ねえ、今度さ。合コンに誘われたんだけどさ

『最近めずらしく頑張るね？この間も行つてたよね、いつも収穫な

いけど

「わたし何が足りないと思つ？」

麻衣子は『うーん、そうだな～』と呟いていた。

『心地、好きな芸能人は？』

『え？花菱遼太郎だけど』

『そうだよね。……その人、わたしたちのお母さん世代だよ

花菱遼太郎は時代劇の脇役を中心に活躍する五十代後半の役者だ。

クールで落ち着いていて、包容力がありそうで何より醸し出す雰囲気が渋くて格好いい。

……自分の好きな人とはあまり共通点がないけれど、好きだ。

その後、最近流行りのアイドルグループの名前を言つてみる、と言われグループ名までは出たけど、メンバーの名前はおろか、何人のグループかも分からなかつた。

最近観たドラマは？と問われすぐには思い出せなくて、

ふと思い出した十年以上前に夢中になつた学園青春ドラマをあげたら麻衣子は携帯の向こうでじしまり無言になつた。

『会話だと思つ』

『会話？』

『あなたと会話しても初対面の人間は盛り上がりないかも』

言われてみれば、初対面の人間と接する際、高い確率で仕事かテレビ、もしくは芸能関係の話題が出る。

高い確率で好きな芸能人は、と若い人に聞かれた時、花菱さんと答えると「何してる人?」と聞き返される。

「な、なるほど……」

麻衣子は『いい報告、待ってるね? 頑張れ』と言つて電話を切つた。

どうして、今まで誰も指摘してくれなかつたんだろう。

この日、わたしは家に帰り夕飯を食べて早々にお風呂を済ませた。リビングのテレビを珍しく占領して観るのは月曜日九時のドラマ。幸運にも、今日が初回放送だつた。

主人公は、失恋して失意のどん底にいる小柄な可愛らしき女性だつた。

ある日偶然立ち寄つたオヤジ臭い定食屋さんで、ヤケになつて大盛りのチャレンジメニューにチャレンジするんだ。

同じく、同じ日に同じ場所で同じチャレンジメニューに挑戦しようとする青年が隣に並ぶ。

お互に負けるもんかと闘志を燃やす。

おやじくのドラマのメイン一人の、出会いだ。

おそらく今後お互に愛し合つようになるメイン一人の、運命の出会いだ。

不覚にも、感動してしまった。

まだ何も始まっていないのに。

ただ出会いだけで泣きそうになつた視聴者はきっと、わたしだけだと思つ。

だつて、この物語の結末はハッピーエンドでしょ？

自分と重なつた主人公に幸せになれる結末が待つてゐるんだつて思つたら、

気が早すぎるので感動してしまつた。

馬鹿みたいだけど、少しだけ涙が出た。

わたしこも、こんな運命の出会いがあるのかな。

## 第4話 合コンへ

週末の金曜日の中ノンまで、短い期間だつたけど勉強はした。ドラマ、バラエティー、クイズ番組。

普段はテレビより読書をして過ごすことの多いわたしが、普段見ないようなテレビ番組をこの数日間仕事から家に帰つてからはずつと観ていた。

今人気のある若い俳優やお笑い芸人の名前と顔は覚えた。

雑誌も読んだ。

昔は愛読していたけどここにこじる読んでいなかつたファッショ  
ン誌から、タウン情報誌まで。

映画はさすがに観には行けなかつたけど、観たいなと思つ映画はいくつか見つけた。

昨日も麻衣子から電話がかかつてきて少しだけ会話をした。  
別に彼氏を見つける行こうとしなくていいんだつて。

わたしはまず色んな男性を見て接して、まずはまともな会話が出来るようになりなさい、と言われた。

……まるで、わたしがまともな会話ができるないような言い方だ。  
ただちよつとだけ、最近の話題に疎いだけだ。

大橋さんの言う通りこの日の合コンは全員男性陣は三十代だった。  
オシャレな居酒屋の個室は男女が八人座るには少しだけ狭くて居心地は正直よくなかった。

最初はなかなか盛り上がりなかつたけど、次第にお酒が入りだすと周りの場の雰囲気が盛り上がりつてくる。

わたしはまつたくお酒が飲めなかつたため、その盛り上がる雰囲気だけをただいつも眺めているだけだつた。

酔つて陽気になつた人に絡まれると雰囲気に酔つた振りをして一緒になつて盛り上がりつているけど、

本当はいつも、少しだけ無理をしていた。

わたしの隣の席に座つたのはたぶん、この中で一番年上で…一番、体格のいい身体の大きな人だつた。

真面目そうで、雰囲気からインテリな感じがして頭の良さそうな人だつた。

彼はビールを飲んでいるようだつたけど、あんまり減つていない。あまり飲まない人なんだつて思つたら少しだけ親近感が沸いた。

彼はいきなりぶしつけな質問をわたしに投げかけてきた。

「彼氏いないの？」

「はい」

「どれくらい？」

「ずっとですけど」

「ずっとって。三年くらい？」

「ずっとは……ずっとですけど」

「結構な期間、いないつてこと？恥ずかしがらなくてもいいのに」

ずっととつて言つたら、生まれてこの方いないつてことなんだけど

……

「つまく伝わらなかつたみたいだ。

隣に座る彼の強めの視線を感じて目を合わせた。

「でも君、サクラさんに似てる

「さ、さくらさん…？」

「知らないの？胸どき（星）トライアングルのサクラさん」

「そ、それって」

「今大人気のアニメだよ」

ア、アニメ！？

しまつた、盲点だつた。

最近のアニメ事情については勉強していない。

この後のわたしは必死に最近観て覚えたドラマの話で盛り返そうとしたけれど、「ドラマには興味がない」って。

あの最新映画観てみたいなって言つたら「僕レンタル派」と言われてしまつた……。

アニメについての勉強を怠つた自分が悪いのか、  
それともただ単にこの日の運が悪かったのかはわからないけど、  
今日の合コンは大失敗に終わつた。

唯一の収穫は、胸どき（星）トライアングルというアニメについて、詳しくなれたことくらいかな。

今日のことを麻衣子に報告したら「他人だつたら笑うといろだけ  
どわたしは笑えない」と言われた。  
わたしだつて笑わすつもりはないし、笑えないよ。

やつぱりわたしは、結婚どころか恋愛にも、うつぶん、それ以前の  
話。

出会いにも縁がないみたい。

## 第5話 暗に空わたし

合コンの畠田の十曜田。

予定もなく家で「ロロロロ」とこと、玄関から母親がわたしを呼ぶ声が聞こえてきた。

行ってみると修ちゃんの姿があった。自分の部屋へと案内すると、ドサッと大きな音を立てて手に持っていた紙袋を床に下ろした。

「どうしたの？ 急に」

「これ、一緒に見よ」と思つて

そう言つて彼が床に広げたのはわたしたちの子供の頃の写真だった。た。

「部屋片付けてたら一番最後に出てきた

「うわあ、懐かしい」

手に取つて昔の写真を眺めていると昔の記憶が蘇ってきて、懐かしく楽しいけどちょっとぴり切ない気持ちになった。

アルバムを手に一ページずつめくらしながら、昨日の合コンの話をしてみた。

「昨日せ、合コン行つたんだ」

「マジですか。変な奴にひつかつたりしてないだろ?」

「なんか、サクライさんに似てるって言われた」

「さくらー」

「胸元アライアンスつていうアニメのキャラクターらしいんだけど……知ってる?」

「いや」

「胸どきとトライアングルの間の（星）は忘れちやダメだつて……」

「……は？」

「ちなみにサクラさんは脇役だけどなかなかの人気キャラで……」「もういい」

修ちゃんは額に手をあてて深いため息を吐いたけどすぐに立てなおすと「変なのには気をつけろよ」と言つた。

「変なのって。何？ 心配してくれるの？」

「そりゃあ、心は妹みたいなもんだし」

「ほお～妹、か」

大丈夫だよ。

こんなのもう、慣れてるから。

だから、傷つへの分かつてるけどもつひとつ質問、してみようかな。

「一度もさ、わたしのこと女として意識したことない？」

「どうした、急に」

「ほら。わたしつて結構、セクシーでしょ？ このうなじあたりが

……」

「あはは！ 何見せてんだよ！ ないない、それは、ない」

「……笑いすぎ」

「妹を意識するなんて、ありえないだろ？」「だよね～」

大丈夫だよ。

こんなの全然、大丈夫。

修ちゃんが帰った後、わたしも外へ出た。  
ただ目的もなく街をブラブラと歩いてみた。

駅前に辿り着くと急に街の色が変わった。

人の数が増え、華やかになった。

オシャレをして歩く人々の色々な色が重なつて耳に届くたくさん  
の声が賑やかだ。

しまった。

ものすごい地味な普段着姿で、気づいたらここまで歩いてきてし  
まつた。

わたしを見ている人なんて誰もいないのに。  
ひどくこの街の景色に浮いているような気がしてきて恥ずかしく  
なつた。

自然と歩く足が止まる、無意識に空を見上げた。  
こんな気持ちの時はスカツと晴れた快晴の空を拝みたいところだ  
つたけど、あいにくどんよりと曇つている。

自分の今の気持ちが、広い空に表れているみたいだった。

ポツリと一粒の水滴が自分の頬に落ちた。

一粒、一粒と。

わたしの頬を濡らしていく。

そうだ、今日の天気予報は午後からは雨の予報だった。

街は、今度は街行く人々が差す傘の色と模様でカラフルな色で彩  
られた。

傘を持たないわたしはやつぱり、この地に一人、浮いているよう

な気がした。

俯いたら次第に増えてくる雨の粒がアルファルトを濡らし色を変え、次第に真っ黒な色になつた。  
どんよりと空は曇つて視界は真っ黒で、なんだか今のわたしの心の中みたい。

「濡れちゃいますよ？」

背後からかけられた声と同時に、真っ黒な視界に鮮やかなブルーの色が混じつた。

わたしの大好きな真っ青な空と同じ色をした傘が、わたしを覆うように影を作つた。

## 第6話 心に差し込む光

わたしの肌を濡らした雨を遮るブルーの傘の持ち主は、わたしをその傘の中へと入れるとわたしの表情を伺つよつひせん元ひよつひせん一度控えめに声を発した。

「風邪、引いちやいますよ？」  
「……あつ」

男性の言葉に肩を僅かに震わせて、自分の髪に手で触れるとじつとりと湿っていた。  
この日着ていた地味な色の服も、水分を吸つてさらりと暗く地味な色へと変化していた。

彼を見上げて瞳を合わせると彼が少しだけ困惑した瞳でわたしを見ていた。

「い、ごめんなさい……」  
「いいえ。雨、急に降つてきましたもんね」

「傘、持つてないんですね？」

「あ、はい……」

手ぶらで肩から斜めに提げた小さめの肩掛けのカバンには、お財布とハンカチ、自宅の鍵と携帯しか入っていない。  
傘を持つていないとほ一田了然だった。

「あの、どこか屋根のあるところまで一緒に歩きませんか？」  
「あ、いります。わたしの家ここから歩いて帰れる距離なんで。走

ります「

彼が差し伸べてくれた傘から抜け出そと一歩下がると、彼の腕が僅かに伸びてわたしをまだ雨から守つた。

目の前の彼の肩が濡れるが見えて一歩再び前に出た。  
休日で賑わうこの景色の中で彼はスース姿だつた。

「よかつたら、この傘使いますか?」

「え?」

「この傘会社の置き傘で、僕今日折り畳み傘持つてますから

彼は傘を持つ手とは反対側の手に持つ通勤力バンを持ち上げて微かに目元に笑みを浮かべた。

「そんな、悪いです! 大丈夫ですから」

「別にあの、安物なんで……。僕よく外回り中傘忘れて買つから会社に置き傘がたくさんあるんです」

今度は白い歯を僅かに見せて恥ずかしそうに少し俯きながらほほ笑んだ。

ほほ笑みながら差しだされた傘の持ち手に自然に手が伸びてしまつた。

普段だつたらこのような他人からの好意には、  
気持ちだけを受け取つてたぶんわたしは逃げるよひにしてこの場を去つたことだと思つう。

初対面の他人から、こんな好意を受けたことがなかつたから実際のことはわかんないけど。

彼から受け取った傘を今度はわたしが持ち、せりて雨足の強くなる雨から一人を守る。

一人で使う小さめの傘だから、その中に一人が入つたりどうしても雨には濡れてしまつ。わたしは出来るだけ彼をかばつようにして腕を伸ばして彼の方へと向けて差した。

彼はカバンの中から手探りで折り畳みを取り出すとわたしの方を見ながら「『めんなさい』、すぐ出るんで」と言つている。彼の方へと傘を差し出しているからわたしが濡れていることに気が遣つてゐるらしい。

謝るのはわたしの方なのに。

「その傘……」

「あ、ああつ。」「、これは……」

男性がカバンから取り出しひろげた折り畳み傘は、うわざのキャラクターのとても可愛いく女の子らしい小さな傘だった。

「これは、その。姉の子供の傘だ」

「はあ……」

「今日、急遽出勤が決まって慌てて出てきたから……」

「そ、そうですか、おつかれさまですー」

「……」

「……」

しばらくお互に俯いて沈黙が続いた。先に顔を上げたのはわたしの方だった。

「あの、やつぱり傘……」

「いいんです、いいんです僕はこれで」

せめて今私が差しているブルーの傘と交換しませんかと提案しようかと思った。

でも借りておいてそんなこと言つのも失礼にあたるかと思つたし、折り畳みがお姉さんの子供のものならなおさらそんなこと言えなかつた。

彼は小さな傘を差してわたしの差す傘の中から抜け出した。

「じゃあ、僕はこれで」

「あの、本当にいいんですか！？」

去ろうとした彼を一度引きとめると田を思いつきり細めて穂やかにほほ笑んだ。

「風邪、引かないようこしてください」

彼のその笑顔は。

どんよりとした暗く厚い雲に覆われたこの空の下でも明るく輝いているように見えた。

「ありがとうございました！！」と深々と頭を下げ、次に顔を上げた時には彼はたくさんの人々が街行く景色の中に消えていた。

しばらくその場に立ちつくしていると、次第に傘に落ちる雨の音が耳に響いてきた。

俯いて、雨に濡れて真っ黒に光るアスファルトを見たらまた急に

気持ちが切なくなってきた。

急に肩が震えて寒さを感じた。  
結構、濡れちゃったからな。

冷たくて切ない感覚を忘れさせるような力が彼の笑顔にはあったんだ。

まるで闇に覆われた暗いわたしの心の中に、小さくて優しくて、でも優しくて穏やかな光が差し込んだみたい。

あんなにも鮮やかに瞳に映つたブルーの傘は、改めてよく見てみると百円ショップで購入できるような安っぽい、ビニール傘だった。

それでも。

雨に打たれて身体は冷えてしまつたけど、傘の持ち手だけがなんだかあつたかい。

## 第7話 婚約者

はじめて結婚式に出席したのは一十一歳の時だった。出来ちゃった結婚をした同じ年の友人の式だった。

彼女の子供は今はもう六歳。

来年小学校に入学する。

あの日は夕焼け空の下、赤く染まつた公園でベンチに一人で座つて、元気に遊ぶ子供たちを見ながらそんなことを思い浮かべていた。

秋の夕焼け空は一年の中でも特別綺麗だなど個人的に思つ。

でも鮮やかに真っ赤に染まる空を見ながら秋を感じて、澄んだ乾いた空気が肌を撫でもうすぐ冬なんだと思つたら、なんだか物悲しい気持ちになつた。

### 【 光・ひかり - 第二章 夕陽の下で 】

わたしの務める小さな会社には食堂なんて立派なものはない。会社のまわりにランチを楽しめるオシャレなカフェもない。だから女性社員に限らずお昼ご飯を持参して、社内で食事を済ませる人が多かつた。

わたしは後輩と一緒に、ほとんど使われることのない最上階の小さな会議室で母親が毎日作ってくれるお弁当を食べる。  
最上階といつても、三階だけだ。

この日はお昼になつて会議室に行つてみると、大橋さんと彼女と同期の山岸さんが楽しそうに会話をして盛り上がっていた。

「あ、秋元さん！」

「なんか、盛り上がりてるね？」

四角く並べられた長いテーブルに並んで座る彼女たちと向かい合うように座った。

「聞いてください！山岸さん、彼氏できただって！」

「えーっ！ そうなの！？ もしかして……前話してたずつと好きだった人！？」

山岸さんは少しだけ頬を赤くして頷いた。

大橋さんと違つて大人しくて気弱な彼女は、長い間片思いしている人がいるけど想いを伝えることができないつてずつと悩んでいた。

「よかつたねえ！！ エーッそつかあ……うん、よかつたね！！  
よかつたねえ！！」

何度もよかつたねと繰り返すわたしに照れながらも何度も何度も彼女は頷いた。

幸せそう。

なぜ自分が頬を緩めているのだろう、笑っちゃうね。でも、嬉しいから。

「秋元さん！ わたしたち負けでられませんよー。」

「そうだよねえ……」

「IJの前の合コン、そういうばどうでした？」

「うーん。残念ながら」

「一緒にすう……なんか隣にいた人にマニアックな会話されちゃつて」

一緒に、って思った。

でもそのマニアックな会話の中身について聞く隙もなく、大橋さんは「秋元さんはぬけがけはナシですからね！」と言つて「コンビニで買つたであろう菓子パンを大きな口を開けて頬張つた。

「山岸さんは、どうやって好きだつた彼と付き合つうことになつたの？」

「なんか……わたしが好きだつて知つてたみたいで、彼の方から『態度で伝わっちゃつたつてやつ？』

「たぶん……」

「どうやつたら伝わるのかな？」

「わ、わからないんですけど……」

わたしは「あ、『ごめん。変なこと聞いて』と言つてお弁当をテーブルの上に広げた。

今更そんなこと知つたつて、わたしにはもう遅いよね。

自宅から会社までの距離は電車に乗つて二十分ほどだった。  
徒歩の時間を入れても一時間見れば十分だった。

午後五時半の定時で上がる頃にはもう辺りは薄暗くなつて、自宅に着く頃には真っ暗になつていた。

由モの前に着くと隣の家から「お邪魔しました」と囁ひ女性の声が聞こえてきた。

その方向に目を向けて少しうると家から出てきた女性と皿が合つた。

暗くてもお互いの家の門に設置された街灯がお互いの顔を照らしてそれが誰かってことはすぐに分かった。

「心ちゃん！ 今、帰り？」

「はい。加奈さんは？」

「わたし？ わたしはちょっと彼のお母さん用事があつて」

「修ちゃんはまだ帰つてないんですか？」

「うん。ああ、いいの。修司には今日は用事なし」

修ちゃんの婚約者の加奈さんはわたしより一年上だナビ、修ちゃんよりもずっとしつかりして、結婚前なのにすでに修ちゃんを尻に敷いてくる。

でも、そんな二人はいつも楽しそう。

「わたし、一次会行くんで。楽しみにします」

「ありがとうございます！ ゲームの豪品、こっぽい用意するから、がんばってねー！」

「はーーー！」

加奈さんは笑顔を見せると「じゃあ」と慌てて背を向けた。

「あ。歩きですか？」

声をかけ引きとめると、加奈さんは振り返つて「うそ」と囁つた。駅までは歩いて十五分ほどかかる。

「よかつたら、駅までですけど送りましょうか」

「でも……今帰つたばっかでしょ。疲れてるでしょ」

「いいえ~。仕事、暇なんで」

わたしが笑顔を見せると加奈さんは「じゃあ、お言葉に甘えちゃおうかな」と言つてこちらに向かつて歩いてくる。

綺麗な長い髪がサラサラと風になびいてとても綺麗だつた。

なんとなく彼女の真似をして髪を伸ばしてみたけど。

わたしの髪はいつも毛先が片方だけハネて、

同じように伸ばしても加奈さんのように風にサラサラとなびく綺麗な髪とは大違ひだつた。

「今日のお礼はケーキでいいですよ」

「修司に言つておくれ」

「あはは」

一緒に由布やの車庫にある車に乗り込むと駅まで加奈さんを送るために車を発進させた。

決めた。

今週の休みの日に、髪を切る。

これから冬になる。

ショートだと首元が寒いから肩くらこの髪を元に戻すのがいいかな。

あ、でも。そんな中途半端な長さにしたら、もっと髪がハネちゃうか。

## 第8話 好きなタイプは？

「心ちゃんは、いい人いの？」

ちょうど赤信号で停車している時だった。

助手席に座る加奈さんが窓から外を眺めながら口にした質問だった。

「いい人、うーん……」

「会社は？」

「いいなつて思う人つてだいたい結婚してません？」

「心ちゃんオヤジ趣味だもんね～」

「オヤジって！」

「花菱なんとかさん、だっけ？」

加奈さんはわたしをからかうように手を口にあててクスクスと笑つている。

「彼は憧れなだけであつて実際好きになる人は違いますよ～

「えー？ どんな人が好きなの？」

「どんな人と言われても……」

返答に困っていると赤信号が青に変わつて車を発進させた。

「もしよかつたらだけどさ、誰か紹介しようか？」

「紹介？」

「うん。ずっと思つてたんだけど修司がセ、つるさんこんだよね

「修ちゃんが？」

「なんか注文が多くて」

「注文?」

「こういう奴はダメだ、とか。心にはこういう奴がいい、とか」

「……なんですか」

加奈さんの「お兄ちゃん気取りもいい加減にじらつて感じだよね」と言つてこちらを向いている視線を感じた。

このあと、加奈さんに事細かに好きな男性のタイプについて聞かれた。

好きなタイプって言葉にして伝えるのは難しい。

手っ取り早く伝える方法として好きな人をあげるのが一番なんだらうけど、それは出来ない。

もしくは芸能人をあげるのが一番簡単なんだけど、わたしの好きな芸能人は……。

結局、辿りついた答えはあの時代劇脇役俳優だった。

彼は好きだけど……実際に、彼と同年代の人を紹介されても困る。若くとも、彼のような渋い空気を醸し出されてもどうしたらいいのか分からぬ。

加奈さんは最初は困った様子だけ、「任せてー」と言つて自信満々な感じでわたしの肩を叩いた。

……大丈夫だらうか。

加奈さんを駅まで送り届け、自宅に戻つて夕飯の前に部屋へ荷物を置きに行つた。

少しだけ勢いよく部屋の扉を開けたら、何かが音を立てて倒れる音がして部屋の明かりをつけた。

部屋を見渡すと、本棚の横に立てかけておいたブルーの傘が倒れていた。

玄関に置いておくと家族に使われてしまいそうだから自分の部屋に持ってきておいた。

返す約束もしていないし、第一これから先会える可能性もほぼゼロに等しい人だけど、借り物には違いないと思つて。

この傘を見ると雨に濡れて寒く冷たいあの雨の日の事よりも、優しくてあつたかい笑顔を思い出す。

「しまったな……」

加奈さん、「どう伝えればよかつた。

冷えた心を瞬時に温めるような、そんなあつたかい笑顔を持つている人が好きですって。

## 第9話 小さな勇気

加奈さんから連絡が入ったのは、一週間後のことだった。  
仕事が終わってロッカーに行き、携帯を見ると一件の不在着信と  
メールが届いていた。

メールの内容は「今夜、時間あるかな?」というものだった。  
わたしは服を着替えて会社を出るとすぐに加奈さんに電話をした。

『心ちゃん、ごめんね~ 今いい? お仕事終わった?』

「はい、どうしたんですか?」

『この間さ、誰か紹介しようかつて話してたよね?』

「はい』

『ちょうど今、さつき偶然学生時代の同級生にばったり会つて一緒に飲んでるの! どう?』

「ど、どうって……』

『あ、ちなみに彼ね修司も知ってる人だから安心だよ』

安心つて……。

そんなことよりも、急過ぎるよ。

視線を下ろし、自分の服装を見る。

制服がある会社だからと急げて、地味な色とデザインの洋服を着ている。

自分には、お似合だけど。

「あのー、心の準備が……』

加奈さんはすこしの間を置いて「ああっ、違つ違つ! 別にお見合せようつてわけじゃないって! 三人で一緒に飲もう?』と

言った。

更に「心ちゃんのタイプの男の人じゃないし！」とも。

それでもまだはつきりとしない態度のわたしに加奈さんは、

「心ちゃんは男の人のお友達、いないでしょ？ 友達作る気持ちで軽い気持ちでおいでよ」と再び優しく言つた。

そう言つてもらえたと、少し気が楽になつた。

誘われれば気軽に続ける合コンと、知人からの紹介では同じ出会いの場でも全然重みが違うようでなんだか戸惑う。

別に、軽い出会いをしたいわけではないのだけど。

何がしたいんだろう。

どうしたいんだろう。

こんなだから、だめなのかなわたし。

本気で、恋愛する気あるのかな。

落ちいる気持ちを振り払つよつて頭を一度だけ軽く振ると、加奈さんが待つお店へと向かつた。

会社帰りのサラリーマンで賑わう、明るい雰囲気の居酒屋だつた。入口から一番奥の隅の掘りごたつのある席に加奈さんと加奈さんの友人は一人でいた。

「じめんなさいー！ 遅くなつて」

「いいのいいの、じつちこそ急にじめん。ほら、座つて」

靴を脱ぎ、手前に座つていた加奈さんが奥へ行き空いた加奈さんの隣に座る。

田の前に座る男性を前に田を合わせて声を揃えて「はじめまして！」

と言つた。

お互に、笑顔だつた。

第一印象だけで人を判断するわけではないけれど、一目見てとても雰囲気が明るくていい人そうだなと思つた。

目を合わせた時、笑つてくれる人つてやっぱりいいなと思つた。

「彼女が……さつき話してた心ちゃん？」

「うん、何で？」

「いや、なんか話のイメージと違つて」

加奈さんとの会話の途中で男性は「あ、失礼な意味じゃないからね」と言つてわたしを見た。

「どうこう話を聞いたんですか？」と言つて一人を交互に見る。

「おっとりして、ちょっと天然入つてる子つて聞いてたんだけど…

…

「えっ！ 加奈さん、本当？」

「うん！ よくさ、修司ともそつ話してるよ？」

「……それって、褒めてるんですか？」

「褒めてるよ、可愛いってことじゃん」

「顔が嘘っぽーい」

「あははっ」

「あははっ」

案外、自分が他人からどう思われているかなんて知らないもんなんだ……。

「で、実際会つてみてどうなの？」

加奈さんの問いかけに男性は「大人しい子だつて思いこんでたか

ら明るくてちょっと意外だつた」と言つて

飲み物のメニューを手にすると「何頼む?」と言つてメニューを差し出した。

初対面の人の前で一杯目からウーロン茶を頼むのもよくないと思つてお酒のメニューを眺めていた。

甘めのカクテルがいいかな。

アルコール度数がついているけど、結局人間が手で作るお酒だからあんまり信用できない。

「心ちゃん、無理しなくていいよ?」

「あ、でも」

お酒が苦手だと知る加奈さんの言葉に反応した男性の「飲めないの?」との問いかけに小さく頷いた。

「そりなんだ、無理しなくていいよ。女の子は飲めなくとも断つてもいいと思う」

「はあ? わたしには飲め飲めって言つて飲ませるよね~?」

「飲め飲めって言つて飲ませてくるのはそっちだろ?」

「聞こえませーん」

二人のやり取りに「あはは」と声をあげて笑つてしまつた。

仲が良さそう。

学生時代の同級生、か。

男性の友達なんてわたしには一人もいないから、この一人を見ていふとちょっとつらいやましいなつて思った。

「あ、心ちゃん。」この謎の男はね

「謎つて」

男性はビールジョッキ片手に加奈さんを睨むようにして見ていく。

「早瀬 彰浩。大学時代の同級生なの。だから心ちゃんひとつ年上だね？お互に修司の後輩なんだよ」

「心ちゃんって、あ、勝手に心ちゃんって呼んじゃってるけど」「あ、いいですよ？」

「佐橋さんどういう関係なの？」

「幼馴染です。家が、隣なんです」

「えつすじー！ ほんとに。へえ、いいね、なんか歳が近い者同士が家が隣同士って」

早瀬さんはわたしの事を明るいって言つたけど、比べ物にならない程に明るくてよく話す人だった。

早瀬さんが「なんか家が隣同士で幼馴染つて設定、よくありますだよな」と加奈さんに振ると「何の設定！？」と冷たくあしらわれてしまつた。

加奈さんは「なんかごめんねー馬鹿な奴で。酔つてるみたい。シラフでも変わんないけどね？」と言つて私の肩に手を置いた。わたしは笑顔で首を横に振つた。

今日はとても楽しかつた。

久しぶりに、お酒の席が楽しかつた。

この日から早瀬さんとメールのやり取りがはじまつた。

だいたい一日に一回。

色気も何もないたわいもない内容のメールのやり取りだつたけど、楽しかつた。

その日たまたまつた出来事や仕事でのことを一日の終わりに面

白可笑しく脚色して報告していく。

わたしも彼以上に面白い内容のメールを作ろうと頑張つて、メール一通作るのに最大一時間かかったこともある。

でも、わたしの平凡な日常ではそれは難しかつた。いくら頑張つても「今日もいつも通り平和でした」としか思い浮かばなかつた。

数日後、早瀬さんから週末のお休みに「メールばつかじゃなんだしせつかくだから一度会つてみようか」と誘われた。

指定された日は、あいにく先週予約が取れなくて行きそびれた美容院の予約を入れていた。

それを伝えたら、「じゃあ夕方からにしよ、『飯行』ついー」と言つてくれた。

氣を遣つてか「他に誰か誘おうか？」加奈と、あつ佐橋さんも誘つてもいいよ」と言つてくれたけど、大丈夫ですと答えた。そんなのなんだか照れくさいし、修ちゃんが一緒の席にいるなんてのはやっぱりまだ複雑だ。

一回会つただけだけど加奈さんの友達だし、明るくていい人そうだった。

男の人と二人で会うなんていつぶりだらう。

「友達を作る……か」

わたしの仲が良い友人はもう全員結婚してしまった。

麻衣子はまずは色々な男性を見て接しみろと言つた。

加奈さんも、まずは友達を作れと言つた。

二十八歳にして、今更な事ばかりだけど今のわたしにはとても大事なことなのかもしねり。

とりあえず週末、ちょっと緊張するけど頑張りつ。

楽しめたら、それでいい。

## 第10話 夕焼け空

早瀬さんとの約束の日、午前中は雨だった。

午後から美容院の予約をしていたわたしが家を出る頃は降っていた雨も止んで、秋の澄んだ青空が広がっていた。

いつもより服を選ぶ時間は長かった。

メイクの時間は、どうだらう。多少は長かったかも。

髪は今から切って綺麗にセットしてもらうから、

片側だけどうしても治らない寝癖がついて毛先がハネているけど気にしない、いつものことだし。

家を出て今日は晴れていたから徒歩で駅まで向かった。

いつも駅前にある同じ美容院の同じ美容師さんを予約時に指名する。

ずっと伸ばしていたからいつもおまかせで全体的に軽くしてもらつたり、整えてもらつたりするだけだった。

今日は一つ注文をしようと思つ。

ずっと伸ばしてきたけど、久々に短くしようとついでそう決めてきた。

ちなみに、今更失恋したからって切るわけじゃないんだよ。  
わたしの失恋なんてもう、ずっと前から分かっていたことなんだから。

ただ、もうマネをするのを止めようつて思った。

どんなに憧れて羨ましくても、わたしは、その人にはなれない。  
やつと分かつたのかな。

あれ、結局髪を切る理由……失恋になるのかな、これって。

美容院が目前に迫つた時、バッグの中の携帯が鳴つた。  
早瀬さんからの着信だつた。

「もしもし?」

『心ちゃん!ー! ジめん!ー!』

「うわあつー び、びっくりした…」

耳元にあてた携帯から急に大きな声が聞こえて驚いて声を上げてしまつた。

なんでも。

午前中、洗車中に足を滑らせて乗つていた台から落ちて腰を強打して、今立つことが出来ないらしい。

ものすごくお気の毒な話だつたけど……「大丈夫ですか」と心配をする声をかけながらもなんだかちょっと笑つてしまいそうになつた。

「あー、わたしのことは、もうそんなの全然気にしないでください」

『今度は必ず今日の謝罪も意味も込めて…』

「フルコースでいいですよ?」

『何の!?』

「あははー!冗談です」

もう一度「お大事してください」と彼に告げ電話を切つた。

何度も謝られてこつちがなんだか申し訳ない気持ちになつてきた。仕方ないよ、だつて立てないんだもん。

「……ふう」

自然とため息が漏れた。

携帯を見ると美容院の予約の時間ぴつたりになつっていた。

目前に見えていた美容院まで小走りで走った。

午後三時に予約していた美容院はこの日とても混んでいて、カットするだけなのに、一時間もかかった。

今は毛先に重みのあるボブが流行りらしい。

美容師さんにそう説明され雑誌を見せてもらつたら可愛いモデルの子が美容師さんの言うその髪型をしていた。

自分がこの髪型にしても、このモデルさんのようには決してならないことは分かつてゐるだけだ。

分かつてゐるんだけど……なんだかなれそうな気がして、いつも髪型を変える時は雑誌のモデルさんを見て、髪型を決める。

肩より少しだけ高い位置で切りそろえられた髪は、いつも片側だけハネていたけど今はちゃんと右も左も内巻になつていて。

美容師さんも自然に内巻になるように切つたと言つてくれた。いつもそう言つてくれるけど……これきっと明日になつたら絶対に片側だけハネる。

でもさつぱりして、気分もなんだか変わつた。

大人っぽくなつた気がする。

……つて、いい歳した大人が何言つてゐるんだか。

美容院を出ると、せつかく髪も綺麗にしてもらつてゐし、この後の予定がなくなつて一人で買い物でもして帰ろうかと思つた。でも暮れ始める空を見たら暗くなる前に帰らうつてそう思つて、家の方へと足を向けた。

家に向かう途中で通り道にある公園に差しかかつた時、元気に走り回る子供たちの声が聞こえてきた。

自分も昔、よくこの公園で遊んだっけ。

赤とんぼが舞う夕陽で赤く染まつた公園を見て、なんだか懐かしい気持ちになった。

公園を外から覗いていると数組の親子が手をつないだり、母親がベビーカーを引いて公園から出て家へと帰つて行く。

公園の中のベンチが空いたのを見て久しぶりに公園の中に入つてベンチに腰を下ろしてみた。

まだ数組残る母親と子供たち。

目の前にある砂場で遊ぶ子供たちはたぶん小学校入学前の五、六歳くらいかな。

そういえば、大学の卒業を前に妊娠をして結婚をした友人がいることを思い出した。

ずっと会つてないし、時々子供の写真つきのメールが届くくらいの付き合いしか今はできていなければ、ふと彼女のことと思い出した。

毎日一緒に笑つて楽しい学生生活を過ごしていた彼女がもう、あんなに大きな子供のお母さんなんだなつて思つたら、少しだけ寂しくなつた。

冷たい風が頬を撫でる。

秋の気候は昼間こそ過ぎしやすい気候だけど、夕方になると急に冷える。

特に、髪を切つて開いた首元に冷たい風が染みる。

空を見上げると真っ赤に鮮やかに染まつた夕焼け空が広がつてい

て、

あんなにも空は暖かい色をしているのに、肌を撫でる風は冷たくつて、もつすぐ冬が来ると思ったらなんだか物悲しい気持ちになつた。

今日だって少しの勇気を出してみたけど、見事に不発だつたし。なんだか色々、うまくいかない。

俯くわたしの視界に、しゃがみ込んでわたしを見上げる無垢な瞳が目にに入った。

小さな、五歳くらいの女の子だった。

「ほんにちわ」

「ほんにちわー！」

わたしの挨拶に無邪気に元気な声を発して、瞳を田一杯にぎゅうと瞑つて照れくさうにして笑つている。

可愛い……。

もう恋愛も結婚もしなくていい、相手もいらないから子供だけ欲しいな。

そんな危険な考えをしてしまつほどに、田の前に突然現れた女子は愛らしくて可愛いつた。

「みずほ～そろそろ帰るよ～」

男性の声に反応して振り向くと、あくびの方向は夕陽の光が

男性を背中から照らして眩しくてよく見えなかつた。

次第に近づく足音と、女の子の「まだあそびたい！」の声。

視界に入った男性の姿に、無意識のうちにわたしは腰を下ろして  
いたベンチから立ち上がつていた。

現れたのは、あの時と同じ笑顔だつた。

「俺、そろそろ帰りたいんだけどな」と言つて優しい笑顔で女子の頭を撫でている。

わたしの視線を感じてか、こちらに振り向いて目を合わせた彼の口元が「あっ」と声を発つすることなく形だけを作つた。

「お久しぶりです。あ、えつと……僕のこと、覚えてますか」「はい、……覚えています」

少し嬉しそうに照れたようにまほほ笑むその笑顔も、声も、優しい瞳も全部。

忘れるはずもない。

## 第1-1話 一番星

「あ、あの……お子さんですか？」

「えつ？ あつああ、この子ですか。子持ちに……見えます？」

「全然！ 『めんなれいー！ 失礼なこと言つて……』

彼は女の子と同じ田線になるようにしゃがむと「もつりゅうとだけ遊んでいいつか」と言つた。

女の子は「うんーーー」と身体がそのまま前方へ向かってでんぐり返してしまった。そのまま勢いで頷くと、砂場田がけて走つて行つた。

「あの子は、姉の子供です」

「あ、……お姉さんいるつて言つてましたよね」

立ち上がりながら俯くよつとしてほほ笑むと軽く頷いた。

彼は視線をベンチに向けると「座りませんか」と言つてわたしの顔を見た。……たぶん。

わたしは視線を合わせることが出来ないでいた。

ベンチの隅に座るとあとから彼が距離を取つて隣に座つた。

「この間は、ありがとうございました」

「いいえ。あの傘ボロくて。雨漏りしませんでしたか？」

「いえ！ すじぐ、助かりました……！」

「そつか、よかったです」

会話が途切れると子供の無邪気な声と、風に揺れる木々の音が聞こえてきた。

「寒くなつてきましたね」  
「は、はい……過」しやすい秋はあつとこいつ間に終わっちゃいます  
よね

彼は空を見上げた。

「でも、秋の夕焼けは一番綺麗だと想います」  
わたしもそう思つて、相手の目を見て言つた。  
彼の横顔だけを見てすぐにまた正面を向いて俯いた。  
だから俯いたまま「はい」とだけ答えた。

「今日は、お出かけですか」「はい、あの、美容院に行つてきました」「言われてみれば……」「あの、結構切つたんですけど」「あ……すみません、鈍くて……」「いえいえ、そんなつもりじや。あ、でもよく髪型違つのにわ  
たしに気がつきましたね！？」  
「あ、本当だ」

彼は「不思議だ」と呟くとすぐには「ナラーバー」と言つて話題を変えた。

「みずほが、あいつが迷惑かけませんでしたか？」「いえいえ、挨拶しただけです。みずほちゃん、ですか。本当に可愛くて……癒されました」「あはは、癒しですか。でも結構やんちゃで手がかかりますよあい  
つ」

「よく遊ぶんですか？」

「休みの日だけですけど時々。今日は午前中はオマジナटに付きました」

わされました」

思わずオマジナटとこうワードに笑ってしまった。

想像したら、可笑しかったから。

失礼だったかな。

「みずほはお母さんで、なぜか僕は飼い犬のポチだったんですよ」

「……はい？」

「普通オマジナटって言つたらお父さんとお母さんですよね？」

「や、そうですね」

「お母さんと犬って。言葉を話すと「イヌはしゃべっちゃダメって……もう、何にも成り立たないじゃないです。僕、吠える」としかできないらしくて」

「あははっ」

「まあでもそこは、ポチになりましたよ。完璧だったと思いません」

「なんかちょっと、得意気な感じですね？」

「ははっ。意外とね、やってみると楽しかったりするんですね」

少し俯きながら笑う彼の横顔は本当に心から楽しそうで見ているだけでこころまで幸せになるような、そんな笑顔だった。

「おにいちゃん、おなかすいた……」

砂場で遊んで砂だらけになつたみずほちゃんが彼の前に立つ。

彼は「うわっ、またすごいことに」と言つて手でみずほちゃんの洋服の砂を払つた。

「そろそろ帰るか」

「うん！！」

立ち上がる彼と、砂まみれのみずほちゃんの手がわたしの目の前で繋がれた。

「じゃあ、僕たちはこれで」

「あ、はい！」

「まだ帰らないんですか？」

「もうちょっとだけ、ここでまわす」

「そうですか」

俯いた顔を上げられなかつた。

去つていく彼らの気配を感じたら、笑つて見送ることが出来なかつた。

行つてしまつ。

あの日出合えたことは偶然だつたとしても、

今日、ここで再会できたのは奇跡みたいなものだ。

今日を最後に一度ともつ、覚えないかもしれない。

いいのかな。

ここまま別れて、いいのかな。

「まつ……、待つて下さ……！」

夢中だつた。

立ち上ると、去り行く一人の背中を追う様にして短い距離を走

つた。

今までのわたしはまわりに手を引かれて、流されて。

合コンに誘われれば行つて、男性を紹介してくれるつて言つてくれる人がいて。

そこでいい出会いがあればいいなって、そう思つてゐるだけで全部が他人任せだった。

本当は、本氣で新たな恋をしようなんて思つていなかつたのかもしれない。

「あの……」の間お借りした傘を返したいんです

今まで生きてきた中で、一番の勇気を振り絞つた瞬間だつたかもしれない。

「今度改めてもう一度、お会いできなうか……？」

唇も声も震えて、目線は泳ぐよつとして定まらなかつた。  
なんとか田線を上げ瞳を合わせると、彼は照れたよつに一度視線をはずし、再びわたしを見た。

その優しい瞳にただわたしだけを映して、大きく一度だけ頷いた。

ほつとしたらなんだか胸にこみ上げてくるものを感じた。  
瞳から溢れだしそうになるものを我慢するよつに歯を噛んで空を

見上げた。

夕焼け空にキラリと光る一番星を見つけた。

それはいつも見る一番星の輝きに比べて数倍も光輝いて見えた。

【光 - ひかり - 第二章 終】

## 第1-2話 恋心

あの日はわたしの大好きな青くて明るい快晴の空だった。秋ももう終わると書くのに、昼間の陽の光の下はポカポカとしても暖かくて気持ちが良かつた。

それなのに、わたしの胸は溢れだしそうな想いで胸がいっぱいに詰まつて苦しかった。

息が苦しくてどうしたらいいのかわからなくて、とにかく俯いたら泣いてしまいそうだった。

空を見上げた。

昔から涙が出やすくなつた時は空を見上げた。

でも明るい太陽の光が眩しくて、細めた瞳の淵からじぼれ落ちる雲を抑えられなかつた。

### 【 光・ひかり - 第三章 なみだ 】

あの公園で再会したあの日、彼のことと知ることができたことと言えば。

みずほちゃんっていう姪っ子がいるつてことと、彼の名字が鈴村すずらんつてことだけだった。

思い切つた行動に出た後、何もしやべれなくなつた私に彼が「僕は鈴村といいます」と名乗つたんだ。

だからわたしも「秋元です」って、ううん、実際には「あつ、ああ、あき、秋元です」だったかな……。

「土日休みですか？来週はお休みですか」という彼の問いかけに「予定ないです。暇です」と返答をした。

すると彼が場所や時間を提案してくれて、わたしはただ彼の言葉に「わかりました」と頷いて簡単に再会の日は決まった。でも今度は偶然でも奇跡でもなくて、きちんと約束をして。

自分の部屋のクローゼットを開けてみた。

服だけは、選べるほどにたくさん持っていた。

毎月もらつお給料の使い道が他にあまりないから……。

ただ寒色系の同系色ばかりで、デザインもシンプルで似たものが多かった。

鏡に映る自分を見てみた。

肩につかない位置で切りそろえてもらつた髪は、美容院に行つた日はちゃんと内巻になつていたのに次の日にはフュイスラインの部分が見事に外側にハネていた。  
片側だけではなくて、ついには両側とも。

自分が全体的に、総合的に見てイママイチなのは十分に分かっていた。

今までは鏡を見るたびにため息しか出なかつた。

でも、今の鏡の中のわたしは頬が赤くなつて顔色がとてもいい。唇の血色も良くて顔全体が明るく見える。

鏡の中の自分と目を合わせたら、自然と控えめでも頬が緩んだ。

ただもう一度会えることが嬉しかつた。

ただそれだけのことがわたしに小さな変化を生んだ。

心の中に小さな明かりが灯ったようだつた。

小さくとも放つ輝きは力強くて、発する熱はとてもあたたかい。この気持ちが何なのか、本当は分かつていただけどまだもう少しだけ知らないフリをしてみたい。

想いが叶う喜びを知らないわたしは悲しい現実しか知らなかつたから。

だからもう少しだけ、あつたかくてくすぐつたいこの気持ちにただ浮かれたい。

そう思つてたんだけどな。

約束の日は次の休日の土曜日だつた。

早くその日になつて欲しいような、しばらくはまだこの何とも言えない緊張感を味わつていたいような複雑な気分だ。

でも憂鬱でしかなかつた月曜日の朝の出勤が久々に良い気分で迎えられた。

会社のロッカーに着いて扉を開くと、定員は五名が限界の狭いロッカーは満員だつたために扉を一旦閉めた。

しばらく外で待つと二人が出て、遅れてもう一人出てきた。

再びロッカーの扉を開けて中に入ると今ちょうど着替えが終わつたであろう山岸さんと、着替えている途中の大橋さんが同期同士で楽しそうにおしゃべりをしていた。

「おはよう」と声をかけると一人の挨拶が返つてきた。

「何話してたの？ 楽しい話？ わたしも混ぜてよー」

「それがそうでもないんですよー？」

大橋さんが山岸さんの顔を伺うようになると山岸さんは「何！？」と少しだけ慌てた様子だった。

「山岸さん来月はせっかくの彼と過ごすはじめてのクリスマスなのに、彼、仕事が忙しくて会えないそうですよ？」

わたしが「それは仕方がないよね……」と言つと大橋さんは「仕方がないで済まないでください」と声を上げ、山岸さんは「あはは」と控えめに笑つた。

何か、おかしなこと言つたかなわたし……。

「だつてえ、少しの時間くらい取つてくれてもいいじゃないですか。クリスマスは一日だけだし！」

「イブもあるから一日あるよ？」「

「そういう問題じゃないです……！」

わたしと大橋さんの会話に割つて入るよひとして山岸さんが「わたしは別にいいんです」と言つた。

「あ……、一日とも会えないの？」

「……みたいです」

「そつか、忙しいんだね彼」

「あの、でもプレゼントだけでも渡そうと思つて。彼も用意してくれるつて」

「そつか、そなんだあ！よかつたね！……で、プレゼントは何にするか決めたの？」

山岸さんは「それが何をあげたらいいのかわからなくて……」と言つて少し俯いた。

大橋さんが「そんなの何が欲しいか本人に聞くのが一番だよ」と

「いつのに対して「なるほど」と思つた。

でもこんな風にして悩めるのもきっと今だけだし、わたしは無責  
任だったかもしないけど「も'つむりとだけ考えてみたら?」と  
言つてみた。

「じゃあ秋元さんだつたら何をあげるんですか?」

「えつわたし!…?」

なぜか大橋さんからの質問にしばらく腕を組んで天井を仰いで考  
えてみた。

しばらくして出た結論は……

「彼は仕事が忙しいみたいだから……栄養ドリンク箱買いとか!」

大橋さんの「ドン引きです」の言葉で一瞬にして却下され  
た。疲れた身体を癒す入浴剤にしどければよかつたかな。そつちだ  
ったかな。

「秋元さんの言つ通りもつちよつとだけ、自分で考えてみます。頑  
張ります」

「なんか」めんね……いつだけで力になれないで

山岸さんは「いいえ」と明るい笑顔を見せると「お先に失礼しま  
す」と言つてロッカーを出て行つた。

「クリスマス、か……」

思わず呟くよつとして言葉を発した。  
まだ先だけどもうそんな時期か、と思つて。  
それだけだつた。

自分には縁があるものだとは思えなかつたから。

でも彼へのプレゼントに悩む山岸さんを見てたら頑張つて欲しいなつて思つた。

……ちよつとだけ羨ましくも思つた。

わたしも、彼女みたいに頑張れるかな。

恋に。

嫌だな、こんな時にあの人の顔が浮かんでしまつた。

やつぱりもう、この気持ちは「まかしようがない、知らないフリをするなんて無理みたい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1203y/>

---

光・ひかり・

2011年11月23日12時48分発行